

「がまんでけへん」型ボランティアと受賞のみなさん

大熊由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）

ボランティア精神の翻訳語として、私がもっとも素晴らしいと思っているのは、「ほっとかれへん」「がまんでけへん」。この分野の第一人者、早瀬昇さんが教えてくださった言葉です。

「ほっとかれへん」は、困難に直面している人々のために一肌脱ぐ、いわば、「義侠心」。一方、自身が困難な境遇になったときに、それを跳ね返し、解決するために立ち上がるのが「がまんでけへん」。我慢が美德とされた時代の日本には、表に出にくかった行動洋式です。

第9回・医療の質・安全学会の「新しい医療のかたち賞」に選ばれた方々は、奇しくも、一人称で語り、行動に移した「がまんでけへん型ボランティア」でした。

■「日本認知症ワーキンググループ」は、「認知症になったらおしまい」「何もわからなくなる」という誤った先入観、「認知症の人は社会の負担」という日本に特に根強い見方を変えたいという当事者の思いから出発しました。

「認知症になっても、希望と尊厳をもって暮らし続けることができる社会を創りだしていく」を目的に、2014年10月に発足しました。



写真は厚生労働省の記者クラブでの会見風景です。

声をあげられる者が、声をあげられないでい

る全国の多数の当事者の代弁をしようと、特技を生かしてフェイスブック、書籍、写真、講演、ホームページ、メディアのインタビューなどを通して、認知症についての日本人の見方を変えつつあります。

■NPO・大阪精神医療人権センターは、薬学部在学中に調子を崩し、精神病院に入院した経験ももつ山本深雪さんが中心になって始まりました。

大阪の精神科病院はかつて、「鬼の安田か、蛇の水間、情け知らずの栗岡か」とうたわれ、日本の中でも特に人権軽視の土地柄で有名でした。

ところが、現在では、訓練を受けた大阪精神医療人権センターのボランティアが、大阪府内のすべての精神科病院（60病院、2万床）に訪問し、立場上、ものが言えない入院患者の思いを病院に伝え、改善を見届け、写真のような冊子やホームページでその情報を公開しています。

2015年11月、30周年を迎えました。



■一般社団法人・日本男性看護師会は、少数派であるための困難を感じている男性看護学生が、2002年、メーリングリスト“男塾”をスタートさせたことから始まりました。



登録者数が国内の男性看護師の約1%、650名を超えた2014年2月15日、正式に活動をスタートしました。

写真はその日の模様です。

ミッションは、『男性看護師の可能性を広げる』、ビジョンは、男性看護師の可能性を広げることによって、『医療・介護における問題解決に助力する』。



自分自身の問題から出発した3つの組織。興味深いことがあります。

認知症ワーキンググループと大阪精神医療人権センターのまわりには、共鳴した「ほっとかれへん型ボランティア」が集まってきています。

そして、日本男性看護師会の中からは、患者さんの尊厳や幸せを目指す「ほっとかれへん型」の活動が、育ちつつあるのでした。

（医療の質・安全学会誌 2015 vol.10 no.4 に加筆）；